川崎医療福祉学会誌　Vol. 12　No. 1　2002　161–167

資　料

中学生の老人イメージとその形成に関連する要因

竹田恵子[*1]　太湯好子[*1]

はじめに

老人イメージに関する研究は，これまで小学生や中学生，大学生，看護学生など様々な人を対象に行われてきた[1−6]．その結果は様々であるが，幼少時から現在に至る老人との接触が老人イメージに影響する要因であることが共通して指摘されている．中野ら[1]は小学生と中学生の老人イメージを比較し，低学年ほど肯定的イメージをもち，中学生では活動性に対しては否定的に評価していることを明らかにした．大学生においても，情緒面では肯定的に老人を捉えているものの身体面では否定的である[4−6]．つまり老人イメージは，中学生ですでに否定的になりつつあり，大学生のもつイメージに近くなっていることが伺える．

ところで中学生は，発達段階では自我の発達時期であり，他者である老人に対しても自分なりのイメージを形成する時期でもある．そのため，偏見や固定観念による老人イメージを形成することもある．それゆえ，中学生の老人イメージを知り，そのイメージ形成に影響している要因を知ることは意味がある．

そこで今回，中学生のもつ老人イメージとその形成に影響する要因を明らかにすることを目的に調査を行い，老人との生活経験との関連を中心に検討した結果を報告する．

研究方法

1．対象及び調査方法

対象は，本研究に協力の得られたK中学校の2年生202人である．

調査の方法は，クラス単位の集合調査であり，調査票の配布および回収を各クラスの担任に依頼した．調査は2000年8月に実施した．

調査内容は，①SD法による老人イメージ（17形容語対，5段階評定），②イメージする具体的老人像，③老人との生活体験，④祖父母に対する親の価値観，である．なお，老人イメージは，中野ら[1]のSD法によるスケールを用いた．

有効回答数は200であったが，本稿で使用する調査項目への無回答が1つでもあったものを除いた152を分析の対象とした．

2．分析方法

現在老人と同居している者と過去に同居していた者を同居経験あり群とし，老人との同居経験の有無別に老人イメージ，イメージする具体的老人像，老人との生活体験，祖父母に対する親の価値観についてクロス表（χ^2検定）を用いて概観した．次に，老人イメージについて主成分分析（バリマックス回転）を行い，老人イメージの構造分析を行った．続けて，主成分分析から求めた個人の因子別の因子得点を従属変数として一元配置分散分析を行い，老人イメージの形成に影響すると考えられる各要因と老人イメージとの関連を確認した．

結　　果

1．調査対象者の老人との生活経験

対象者152人中，同居経験あり群（同居54人，過去に同居21人）は75人（49.3%），同居経験なし群が77人（50.7%）であった．対象者の老人との生活体験を表1に示した．

86.2%の生徒がよく話をする老人を「祖父母」と答えた．接して印象に残った老人が「いる」者は52.0%であった．

祖父母との会話では，「よく話をする」者は55.3%であり，会話の内容も，「お互いに話をする」が47.4%であった．別居の祖父母との接触の機会は，「ときどき会う」が38.9%で最も多かった．また，幼少時に祖父母から世話を受けた経験では，「いつも」が46.7%，「ときどき」が38.8%であった．

同居経験の有無により有意差のあった項目は，幼少時に祖父母から世話を受けた経験であり，同居経験あり群では62.7%が「いつも」世話をしてもらっているのに対し，同居経験なし群は，「いつも」が31.2%，「ときどき」が49.4%であった（$p<.01$）．

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　保健看護学科
（連絡先）竹田恵子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学

表１　対象者の老人との生活体験

	同居経験あり N＝75	同居経験なし N＝77	全体 N＝152	検定
よく話をする老人				
祖父母	66(88.0)	65(84.4)	131(86.2)	
祖父母以外	3(4.0)	1(1.3)	4(2.6)	
話す機会がほとんどない	6(8.0)	11(14.3)	17(11.2)	
印象に残った老人の有無				
あり	41(54.7)	38(49.4)	79(52.0)	
なし	34(45.3)	39(50.6)	73(48.0)	
祖父母との会話・頻度				
よく話をする	47(61.4)	38(49.4)	84(55.3)	
時々話をする	22(29.3)	28(36.4)	50(32.9)	
あまり話をしない	6(8.0)	7(9.1)	13(8.6)	
全く話をしない	1(1.3)	4(5.1)	5(3.2)	
祖父母との会話・内容				
お互いに	34(45.4)	38(49.4)	72(47.4)	
一方的に	15(20.0)	19(24.7)	34(22.4)	
世間話程度	19(25.3)	13(16.9)	32(21.1)	
挨拶程度	7(9.3)	7(9.0)	14(9.1)	
別居の祖父母との接触機会				
よく会う	22(29.3)	27(35.1)	49(32.2)	
ときどき会う	30(40.0)	29(37.7)	59(38.9)	
あまり会わない	12(16.0)	6(7.8)	18(11.8)	
電話でよく	3(4.0)	10(13.0)	13(8.6)	
ほとんど接触がない	6(8.0)	5(6.4)	11(7.2)	
祖父母がいない	2(2.7)	–	2(1.3)	
幼少時に祖父母から世話を受けた経験				p<0.01
いつも	47(62.7)	24(31.2)	71(46.7)	
時々	21(28.0)	38(49.4)	59(38.8)	
たまに	5(6.7)	9(11.7)	14(9.2)	
ほとんどない	2(2.6)	5(6.5)	7(4.6)	
全くない	–	1(1.2)	1(0.7)	

(　) 内は N に対する％

２．祖父母に対する親の価値観

祖父母とのつきあいに対する親の考えは，36.2％の生徒が「ときどき会うのがよい」，17.1％が「いつも一緒に生活するのがよい」と答えている．しかし42.1％は「親の考えを知らない」であった（表２）．また，同居経験あり群は「いつも一緒に生活」が26.7％，「ときどき会う」が25.3％であるのに対して，同居経験なし群は「ときどき会う」が46.8％と多く，両群に違いが認められた（p<.01）．

３．老人イメージ

老人イメージの回答をする時にイメージした老人の年齢は，「70～75歳」が34.9％と最も多かった．「60～70歳」は24.3％であり，75.7％の生徒は「70歳以上」を老人とイメージしていた．また，老人と聞いて思い浮かべた人は，「祖父母」が73.7％であった．老人の年齢，思い浮かぶ人ともに同居経験による違いはみられなかった（表３）．

老人イメージ17項目の評点の平均は3.15であり，図１に各形容詞ごとの平均値を示した．３点以上は11項目あり，「冷たい－暖かい」「だらしない－きちんとした」「悪い－良い」は3.5点以上とより肯定的なイメージであった．一方，３点以下は６項目で，「遅い－速い」が2.47と最も低かった．同居経験の有無によるイメージの差は認められなかった．

４．老人イメージの構造

老人イメージの構造を把握するために主成分分析を行った．まず17項目全体で行ったところ，４因子が抽出されたが，第４因子は固有値が1.0をわずかに上回ったに過ぎず，しかも「悲しい－うれしい」の１項目のみであった．また，「弱い－強い」は因子負

表2　祖父母に対する親の価値観

	同居経験あり N＝75	同居経験なし N＝77	全体 N＝152	検定
祖父母とのつきあいに対する親の考え				p<0.01
いつも一緒に生活	20(26.7)	6(7.8)	26(17.1)	
ときどき会う	19(25.3)	36(46.8)	55(36.2)	
たまに会話する程度	2(2.7)	4(5.1)	6(3.9)	
つき合わない	−	−	−	
その他	1(1.3)	−	1(0.7)	
考えを知らない	33(44.0)	31(40.3)	64(42.1)	

(　　) 内は N に対する%

表3　対象者のイメージする具体的老人像

	同居経験あり N＝75	同居経験なし N＝77	全体 N＝152
回答時にイメージした老人の年齢			
60〜70歳	17(22.7)	20(26.0)	37(24.3)
70〜75歳	25(33.3)	28(36.4)	53(34.9)
75〜80歳	19(25.3)	24(31.2)	43(28.3)
80歳以上	14(18.7)	5(6.4)	19(12.5)
「老人」と聞いて思い浮かぶ人			
祖父母	54(72.0)	58(75.3)	112(73.7)
祖父母以外の老人	19(25.3)	13(16.9)	32(21.0)
思い浮かぶ人がいない	2(2.7)	6(7.8)	8(5.3)

(　　) 内は N に対する%

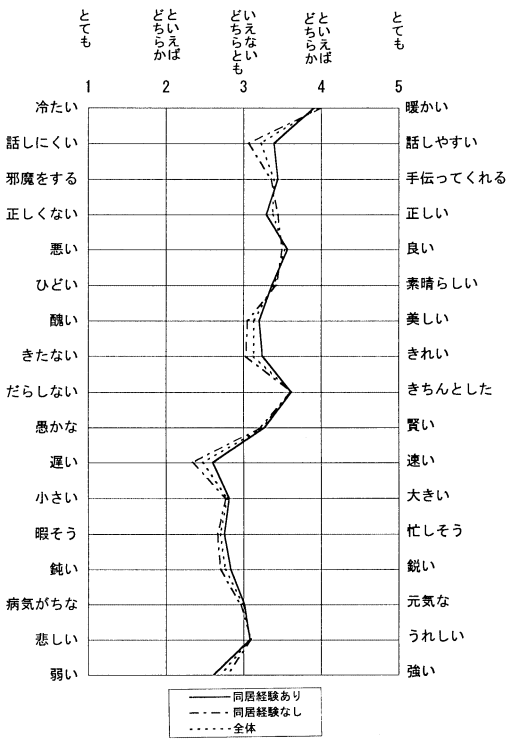

図1　老人イメージ

荷量が0.5を下回っていた．そこで，「悲しい−うれしい」「弱い−強い」の2項目を除いた15項目について，再度，第3因子までの抽出優先を付した主成分分析（バリマックス回転）を行った．その結果，表4に示すような3つの因子が抽出された．

第1因子に負荷が高い項目は，「冷たい−暖かい」「話しにくい−話しやすい」などの6項目で，暖かさや品格など老人の内面的な側面を評価する因子であると解釈して，「内面的評価因子」と命名した．第2因子に負荷の高い項目は，「醜い−美しい」「きたない−きれい」などの4項目で，老人の外面的な側面を評価する因子であると解釈して，「外面的評価因子」と命名した．第3因子に負荷の高い項目は，「遅い−速い」「小さい−大きい」などの5項目であり，「行動的評価因子」と命名した．

各因子に含まれる項目の平均値は，第1因子では3.48，第2因子で3.28，第3因子で2.74であった．

5．老人イメージに影響を及ぼす要因

5.1老人との接触体験との関連

回答時にイメージした老人の年齢による老人イメージに差は認められなかった（図2）．しかし，「思い浮かぶ人がいない」と答えた者は，それ以外の者に比べ内面的評価因子において否定的であった（p<.01）（図3）．また，接して印象に残った老人「あり」の者は「なし」の者に比して内面的評価因子において肯定的であった（p<.001）（図4）．

5.2祖父母との交流との関連

同居している者はしていない者に比べて，外面的評価因子において肯定的であった（p<.05）（図5）．

表4　老人イメージの主成分分析結果

		因子負荷量	固有値	寄与率	累積寄与率
第1因子（内面的評価因子）					
冷たい	暖かい	0.731			
話しにくい	話しやすい	0.68			
邪魔をする	手伝ってくれる	0.649	5.429	36.197	36.197
正しくない	正しい	0.648			
悪い	良い	0.643			
ひどい	素晴らしい	0.532			
第2因子（外面的評価因子）					
醜い	美しい	0.748			
きたない	きれい	0.726	1.671	11.142	47.338
だらしない	きちんとした	0.682			
愚かな	賢い	0.591			
第3因子（行動的評価因子）					
遅い	速い	0.718			
小さい	大きい	0.718			
暇そう	忙しそう	0.666	1.121	7.47	54.809
鈍い	鋭い	0.609			
病気がちな	元気な	0.539			

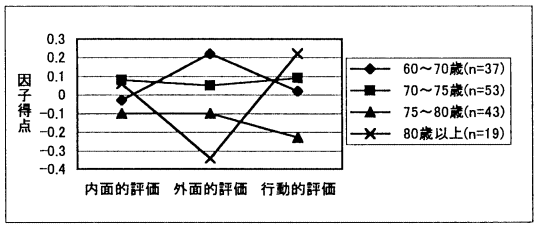

図2　「回答時にイメージした老人の年齢」

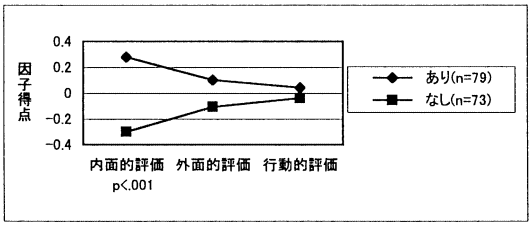

図4　「印象に残った老人の有無」と老人イメージ

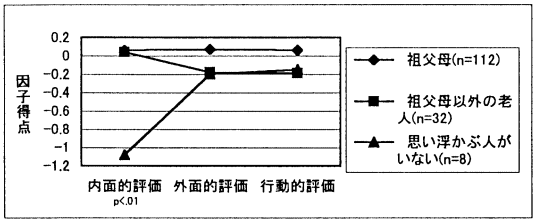

図3　「老人と聞いて思い浮かべる人」と老人イメージ

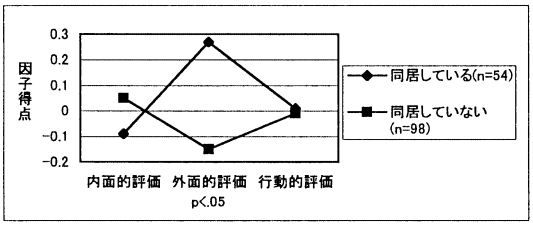

図5　「老人との同居の有無」と老人イメージ

祖父母との会話では，「よく話をする」者は「あまり・全く話をしない」者に比して，内面的評価因子（p<.05）と外面的評価因子（p<.01）において肯定的であった（図6）．祖父母との会話内容では，「お互いに話す」者はその他の者に比べて，内面的評価因子（p<.05）と外面的評価因子（p<.05）において肯定的であった（図7）．しかし，別居の祖父母との接触の機会（図8）や幼少時に祖父母から世話を受けた経験（図9）による老人イメージに差はなかった．

5.3祖父母に対する親の価値観との関連

祖父母とのつきあいに対する親の考えが，「時々会う・たまに会う」である者は，「いつも一緒に生活」「考えを知らない」者に比して内面的評価因子において肯定的であった（p<.001）（図10）．

考　　察

1．中学生のもつ老人イメージ

対象の中学生は，76%が70歳以上を老人とイメージして回答していた．また，74%の者が老人と聞いて最初に思い浮かべる人は「祖父母」であった．

本調査における老人イメージ17項目の評点の平均は3.15であった．さらに老人イメージは「内面的評

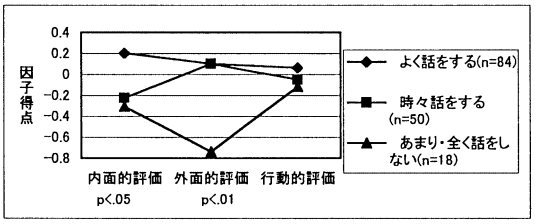

図6　「祖父母との会話頻度」と老人イメージ

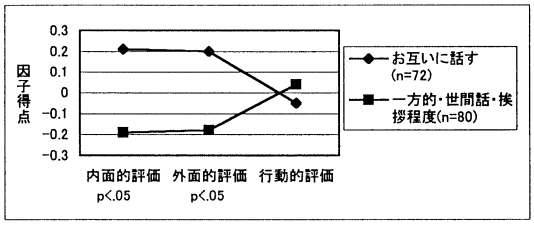

図7　「祖父母との会話内容」と老人イメージ

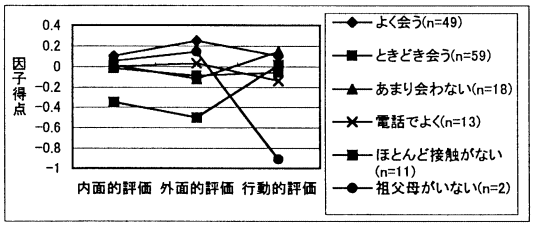

図8　「別居の祖父母との接触の機会」と老人イメージ

価因子」「内面的評価因子」「内面的評価因子」の3因子に分類され，平均値はそれぞれ3.48，3.28，2.74であったことより，対象の中学生の老人イメージは全体としては肯定的であること，情緒的には肯定的に捉えているが活動性や身体面では否定的な捉え方をしていることが明らかになった．また中野ら[1]は中学生の老人イメージの構造を「評価」因子と「活動」因子の2つに分類しているが，本調査結果からは「評価」因子がさらに「内面的評価因子」と「外面的評価因子」に分類されることが示唆された．情緒的には肯定的に捉えながら活動性や身体面で否定的であるという傾向は，中学生を対象とした中野ら[1]や大学生を対象とした大谷ら[4]，保坂ら[5]の調査結果と一致している．さらに中野ら[1]は，小学生では中学生に比して全体的に肯定的に老人を捉えていることを指摘している．以上より，中学生の老人イメージは小学生よりも大学生のもつイメージに近いと考えられるが，これは中学生が価値観を確立させていく時期にある[7]という成長発達の過程における変化として捉えることができそうである．

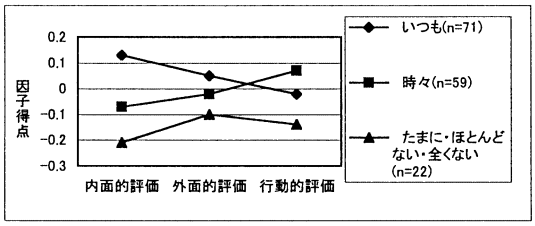

図9　「幼少時に祖父母から世話を受けた経験」と老人イメージ

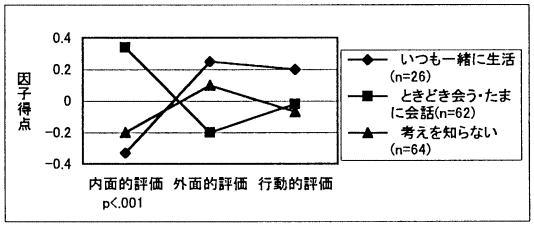

図10　「祖父母との付き合いに対する親の考え」と老人イメージ

2．老人イメージの形成に影響を及ぼす要因

対象となった中学生は，86%がよく話をする老人を「祖父母」と回答していること，74%が老人と聞いて思い浮かぶ老人を「祖父母」としていることから，老人との交流は祖父母との交流が中心となっており，祖父母以外の老人をイメージできにくいことが推察される．また，祖父母との付き合いに対する親の考えを「知らない」者が42%，接して印象に残った老人が「なし」である者が48%と，老人への関心が余り高くないことも推察された．一方，老人との交流に影響すると考えられる老人との同居経験に注目して老人との生活体験や老人イメージについて比較したが，幼少時に祖父母から受けた世話において違いを認めたに過ぎなかった．この結果は，同居経験はそれ自体あまり重要な要因ではなく，イメージは環境の中で個人がどのような経験をしているかによって規定されるという保坂ら[5]の指摘に関係すると考えられる．

そこで，老人イメージを構成する因子別に影響する要因をみたところ，以下のことが明らかになった．内面的評価因子に対して肯定的に影響する要因は，思い浮かぶ老人がいることや接して印象に残った老人がいること，祖父母との会話の頻度が多く，祖父母とお互いに話をすることであった．外面的評価因子に対しては，老人と同居していることや祖父母との会話の頻度が多く，祖父母とお互いに話をすることが関係していた．以上の結果は，老人の内面的評価因子や外面的評価因子などの情緒的イメージの形成に老人との交流の量と質が影響していることを示していると考える．特に内面的評価因子では，接し

て印象に残った老人がいることが肯定的イメージに関連しており，老人との交流の質と共に老人への関心の高さが関係すると推察される．また，祖父母に対する親の価値観も内面的評価因子に対して影響していた．子どもの持つ否定的高齢者像の形成には親と祖父母の関係が影響し，そのインパクトが強いと成人した後も長くそのイメージを持ち続ける[8]といわれる．親の価値観が老人イメージの形成において無視できない要因であることが，大学生を対象とした調査[4−6]で示されており，対象の中学生においても，親の価値観が祖父母との同居経験や祖父母との会話頻度などを規定し様々な要因に直接的・間接的に作用して，情緒的イメージの形成に影響している[4]ことが推察される．本調査では，祖父母とのつきあいに対して「ときどき会う・たまに会う」といった程よい距離を持っていることが肯定的に影響すると推察された．これは，高齢の親とその子どもとの最も望ましいあいだがらは，<距離を置いた親密さ>であり，その基調は相互的な愛情と独立性の尊重であるという村田[9]の考えに一致する．

本調査において，行動的評価因子に有意に影響する要因は認められなかった．このことは，老いるということが身体的機能の衰退と深く関連しているため，老人との交流経験に関係なくイメージ形成されているためと推察された．

結　　論

中学生のもつ老人イメージとその形成に影響する要因を明らかにすることを目的に調査を行った結果，以下のことが明らかになった．

1.中学生のもつ老人イメージの構造は，「内面的評価因子」「外面的評価因子」「行動的評価因子」の3因子からなり，54.8%の寄与率であった．老人イメージは行動的評価因子である活動性においては否定的な傾向にあったが，内面的評価因子と外面的評価因子など情緒面では肯定的なイメージであった．

2.内面的評価因子や外面的評価因子などの情緒的イメージの形成において，老人との交流の量と質や祖父母に対する親の価値観が影響していることが示唆された．

3.行動的評価因子に対するイメージは，老いるということが身体的機能の衰退と深く関連しているため，老人との交流経験に関係なく形成されていることが推察された．

本調査にご協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます．

文　　献

1）中野いく子，冷水豊，中谷陽明，馬場純子：小学生と中学生の老人イメージ —SD法による測定と比較—．社会老年学，**39**，11–22，1994．
2）馬場純子，中野いく子，冷水豊，中谷陽明：中学生の老人観 —老人観スケールによる測定—．社会老年学，**38**，3–12，1993．
3）中野いく子：児童の老人イメージ —SD法による測定と要因分析—．社会老年学，**34**，23–36，1991．
4）大谷英子，松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究 （1）大学生の老人イメージと生活経験の関連．日本看護研究学会雑誌，**18**(4)，25–38，1995．
5）保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人イメージ —SD法による要因分析—．社会老年学，**27**，22–33，1988．
6）太湯好子，酒井恒美，杉田明子，初鹿真由美：看護科学生が抱く老人のイメージ．川崎医療短期大学紀要，**11**，7–12，1991．
7）高尾兼利：発達のプロセスII —青年期以降—．平山諭，鈴木隆男編著，発達心理学の基礎I　ライフサイクル，第1版，ミネルヴァ書房，京都，99–115，1994．
8）林洋一：高齢者にみられる性格．詫摩武俊，鈴木乙史，清水弘司，松井豊編，シリーズ・人間と性格 第2巻 性格の発達，初版，ブレーン出版，東京，295–305，2000．
9）村田孝次：生涯発達 生活心理学的アプローチ，初版，培風館，東京，34，1997．

（平成14年5月31日受理）

Junior High School Students' Images of the Elderly and their Formative Factors

Keiko TAKEDA and Yoshiko FUTOYU

(Accepted May 31, 2002)

Key words : IMAGE FOR THE ELDERLY, FORMATIVE FACTORS, JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS, SEMANTIC DIFFERENTIAL TECHNIQUE

Correspondence to : Keiko TAKEDA

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.1, 2002 161–167)